将軍

芥川龍之介

一　白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だった。第×師団第×聯隊の白襷隊（しろだすきたい）は、松樹山（しょうじゅざん）の補備砲台（ほびほうだい）を奪取するために、九十三高地（くじゅうさんこうち）の北麓（ほくろく）を出発した。

路（みち）は山陰（やまかげ）に沿うていたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だった。その草もない薄闇（うすやみ）の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷（しろだすき）ばかり仄（ほの）めかせながら、静かに靴（くつ）を鳴らして行くのは、悲壮な光景に違いなかった。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立った時から、別人のように口数（くちかず）の少い、沈んだ顔色（かおいろ）

をしているのだった。が、兵は皆思いのほか、平生の元気を失わなかった。それは一つには日本魂(やまとだましい)の力、二つには酒の力だった。

しばらく行進を続けた後(のち)、隊は石の多い山陰(やまかげ)から、風当りの強い河原(かわら)へ出た。

「おい、後(うしろ)を見ろ。」

紙屋だったと云う田口(たぐち)一等卒(いっとうそつ)は、同じ中隊から選抜された、これは大工(だいく)だったと云う、堀尾(ほりお)一等卒に話しかけた。

「みんなこっちへ敬礼しているぜ。」

堀尾一等卒は振り返った。なるほどそう云われて見

ると、黒々と盛り上った高地の上には、聯隊長始め何人かの将校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向う一隊の士卒へ、最後の敬礼を送っていた。

「どうだい？　大したものじゃないか？　白襷隊になるのも名誉だな。」

「何が名誉だ？」

堀尾一等卒は苦々しそうに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだぜ。して見ればあれは××××××××××××そうって云うのだ。こんな安上りな事はなかろうじゃねえか？」

「それはいけない。そんな事を云っては×××すまない。」
「べらぼうめ！　すむもすまねえもあるものか！　酒保（しゅほ）の酒を一合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」
田口一等卒は口を噤（つぐ）んだ。それは酒気さえ帯びていれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣（な）れているからだった。しかし堀尾一等卒は、執拗（しつよう）にまだ話し続けた。
「それは敬礼で買うとは云わねえ。やれ×××とか、やれ××××だとか、いろんな勿体（もったい）をつけやが

るだろう。だがそんな事は嘘っ八だ。なあ、兄弟。そうじゃねえか？」

堀尾一等卒にこう云われたのは、これも同じ中隊にいた、小学校の教師だったと云う、おとなしい江木上等兵だった。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云う訣か、急に噛みつきそうな権幕を見せた。そうして酒臭い相手の顔へ、悪辣な返答を抛りつけた。

「莫迦野郎！　おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」

その時もう白襷隊は、河原の向うへ上っていた。そ

こには泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひっそりと暁を迎えている、――その家々の屋根の上には、石油色に襞をなぞった、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫って見えるのだった。隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいずれも武装したまま、幾条かの交通路に腹這いながら、じりじり敵前へ向う事になった。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這いを続けて行った。「酒保の酒を一合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」――そう云う堀尾一等卒の言葉は、同時にまた彼の腹の底だった。しかし口数の少い彼は、じっ

とその考えを持ちこたえていた。それだけに、一層戦友の言葉は、ちょうど傷痕（きずあと）にでも触（ふ）れられたような、腹立たしい悲しみを与えたのだった。彼は凍（こご）えついた交通路を、獣（けもの）のように這い続けながら、戦争と云う事を考えたり、死と云う事を考えたりした。が、そう云う考えからは、寸毫（すんごう）の光明も得られなかった。死は×××××にしても、所詮（しょせん）は呪（のろ）うべき怪物だった。戦争は、――彼はほとんど戦争は、罪悪と云う気さえしなかった。罪悪は戦争に比べると、個人の情熱に根ざしているだけ、×××××××出来る点があった。しかし×××××××××××××ほかならなかった。し

かも彼は、——いや、彼ばかりでもない。各師団から選抜された、二千人余りの白襷隊は、その大なる××にも、厭でも死ななければならないのだった。……

「来た。来た。お前はどこの聯隊だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊はいつか松樹山の麓の、集合地へ着いているのだった。そこにはもうカアキイ服に、古めかしい襷をあやどった、各師団の兵が集まっている、——彼に声をかけたのも、そう云う連中の一人だった。その兵は石に腰をかけながら、うっすり流れ出した朝日の光に、片頬の面皰をつぶしていた。

「第×聯隊だ。」
「パン聯隊だな。」
江木上等兵は暗い顔をしたまま、何ともその冗談に答えなかった。
何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼我の砲弾が、凄まじい唸りを飛ばせていた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙を揚げた。その土煙の舞い上る合間に、薄紫の光が迸るのも、昼だけに、一層悲壮だった。しかし二千人の白襷隊は、こう云う砲撃の中に機を待ちながら、やはり平生の元気を失わなかった。また

恐怖に挫(ひし)がれないためには、出来るだけ陽気に振舞(ふるま)うほか、仕様のない事も事実だった。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子(ひょうし)に長い叫び声が、もう一度頭上の空気を裂(さ)いた。彼は思わず首を縮(ちぢ)めながら、砂埃(すなほこり)の立つのを避けるためか、手巾(ハンカチ)に鼻を掩(おお)っていた、田口(たぐち)一等卒に声をかけた。

「今のは二十八珊(にじゅうはっサンチ)だぜ。」

田口一等卒は笑って見せた。そうして相手が気のつかないように、そっとポケットへ手巾(ハンカチ)をおさめた。それは彼が出征する時、馴染(なじみ)の芸者に貰って来た、縁(ふち)に

繍（ぬい）のある手巾（ハンカチ）だった。

「音が違うな、二十八珊（サンチ）は。――」

田口一等卒はこう云うと、狼狽（ろうばい）したように姿勢を正した。同時に大勢（おおぜい）の兵たちも、声のない号令（ごうれい）でもかかったように、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN将軍が、何人かの幕僚（ばくりょう）を従えながら、厳然と歩いて来たからだった。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

将軍は陣地を見渡しながら、やや錆（さび）のある声を伝えた。

「こう云う狭隘（きょうあい）な所だから、敬礼も何もせなくとも

好（よ）い。お前達は何聯隊の白襷隊（しろだすきたい）じゃ？」
田口一等卒は将軍の眼が、彼の顔へじっと注がれるのを感じた。その眼はほとんど処女のように、彼をはにかませるのに足るものだった。
「はい。歩兵第×聯隊であります。」
「そうか。大元気（おおげんき）にやってくれ。」
将軍は彼の手を握った。それから堀尾（ほりお）一等卒へ、じろりとその眼を転ずると、やはり右手をさし伸（の）べながら、もう一度同じ事を繰返（くりかえ）した。
「お前も大元気にやってくれ。」
こう云われた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化（こうか）した

ように、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬骨(ほおぼね)の高い赭(あか)ら顔。——そう云う彼の特色は、少くともこの老将軍には、帝国軍人の模範(もはん)らしい、好印象を与えた容子(ようす)だった。将軍はそこに立ち止まったまま、熱心になお話し続けた。

「今打っている砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こっちの物にしてしまうのじゃ。そうすると予備隊は、お前たちの行った跡(あと)から、あの界隈(かいわい)の砲台をみんな手に入れてしまうのじゃ。何でも一遍(いっぺん)にあの砲台へ、飛びつく心にならなければいかん。——」

そう云う内に将軍の声には、いつか多少戯曲的な、

感激の調子がはいって来た。
「好(よ)いか？　決して途中に立ち止まって、射撃なぞをするじゃないぞ。五尺の体を砲弾だと思って、いきなりあれへ飛びこむのじゃ、頼んだぞ。どうか、しっかりやってくれ。」
将軍は「しっかり」の意味を伝えるように、堀尾一等卒の手を握った。そうしてそこを通り過ぎた。
「嬉しくもねえな。――」
堀尾一等卒は狡猾(こうかつ)そうに、将軍の跡(あと)を見送りながら、田口一等卒へ目交(めくば)せをした。
「え、おい。あんな爺(じい)さんに手を握られたのじゃ。」

田口一等卒は苦笑(くしょう)した。それを見るとどう云う訣(わけ)か、堀尾一等卒の心の中(うち)には、何かに済まない気が起った。と同時に相手の苦笑が、面憎(つらにく)いような心もちにもなった。そこへ江木(えぎ)上等兵が、突然横合いから声をかけた。

「どうだい、握手で×××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人真似をしちゃ。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはいられなかった。

「××れると思うから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思っている。」

江木上等兵がこう云うと、田口一等卒も口を出した。

「そうだ。みんな御国(おくに)のために捨てる命だ。」

「おれは何のためだか知らないが、ただ捨ててやるつもりなのだ。×××××××でも向けられて見ろ。何でも持って行けと云う気になるだろう。」

江木上等兵の眉（まゆ）の間（あいだ）には、薄暗い興奮が動いていた。

「ちょうどあんな心もちだ。強盗は金さえ巻き上げれば、×××××××云いはしまい。が、おれたちはどっち道（みち）死ぬのだ。××××××××××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗（きれい）に×××やった方が好いじゃないか？」

こう云う言葉を聞いている内に、まだ酒気が消えていない、堀尾一等卒の眼の中には、この温厚（おんこう）な戦友に

対する、侮蔑の光が加わって来た。「何だ、命を捨てるくらい？」――彼は内心そう思いながら、うっとり空へ眼をあげた。そうして今夜は人後に落ちず、将軍の握手に報いるため、肉弾になろうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、手擲弾に中った江木上等兵は、全身黒焦になったまま、松樹山の山腹に倒れていた。そこへ白襷の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鉄条網の中を走って来た。彼は戦友の屍骸を見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大声に笑い出した。大声に、――実際その哄笑の声は、烈しい敵味方の銃火の中に、気味の悪い反響を喚び起した。

「万歳！　日本万歳！　悪魔降伏。　怨敵退散。　第×聯隊万歳！　万歳！　万々歳！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破った、手擲弾の爆発にも頓着せず、続けざまにこう絶叫していた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創のために、突撃の最中発狂したらしい、堀尾一等卒その人だった。

二　間諜

明治三十八年三月五日の午前、当時全勝集に

駐屯していた、Ａ騎兵旅団の参謀は、薄暗い司令部の一室に、二人の支那人を取り調べて居た。彼等は間牒の嫌疑のため、臨時この旅団に加わっていた、第×聯隊の歩哨の一人に、今し方捉えられて来たのだった。

　この棟の低い支那家の中には、勿論今日も坎の火っ気が、快い温みを漂わせていた。が、物悲しい戦争の空気は、敷瓦に触れる拍車の音にも、卓の上に脱いだ外套の色にも、至る所に窺われるのであった。殊に紅唐紙の聯を貼った、埃臭い白壁の上に、束髪に結った芸者の写真が、ちゃんと鋲で止めてあるのは、

滑稽でもあれば悲惨でもあった。

そこには旅団参謀のほかにも、副官が一人、通訳が一人、二人の支那人を囲(かこ)んでいた。支那人は通訳の質問通り、何でも明瞭(めいりょう)に返事をした。のみならずやや年嵩(としかさ)らしい、顔に短い髯(ひげ)のある男は、通訳がまだ尋ねない事さえ、進んで説明する風があった。が、その答弁は参謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間牒にしたい、反感に似たものを与えるらしかった。

「おい歩兵(ほへい)!」

旅団参謀は鼻声に、この支那人を捉(とら)えて来た、戸口にいる歩哨を喚(よ)びかけた。歩兵、――それは白襷隊(しろだすきたい)

に加わっていた、田口一等卒にほかならなかった。――彼は戸の卍字格子を後に、芸者の写真へ目をやっていたが、参謀の声に驚かされると、思い切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴まえたのは？　掴まえた時どんなだったか？」

人の好い田口一等卒は、朗読的にしゃべり出した。

「私が歩哨に立っていたのは、この村の土塀の北端、奉天に通ずる街道であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて来ました。すると木の上の中隊

長が、――」
「何、木の上の中隊長？」
参謀はちょいと目蓋を挙げた。
「はい。中隊長は展望のため、木の上に登っていられたのであります。――その中隊長が木の上から、摑まえろと私に命令されました。」
「ところが私が捉えようとすると、そちらの男が、――はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようとしました。……」
「それだけか？」
「はい。それだけであります。」

「よし。」
旅団参謀は血肥り(ちぶと)の顔に、多少の失望を浮べたまま、通訳に質問の意を伝えた。通訳は退屈(たいくつ)を露(あらわ)さないため、わざと声に力を入れた。
「間諜でなければ何故(なぜ)逃げたか？」
「それは逃げるのが当然です。何しろいきなり日本兵が、躍(おど)りかかってきたのですから。」
もう一人の支那人、——鴉片(あへん)の中毒に罹(かか)っているらしい、鉛色の皮膚(ひふ)をした男は、少しも怯(ひる)まずに返答した。
「しかしお前たちが通って来たのは、今にも戦場にな

る街道（かいどう）じゃないか？　良民ならば用もないのに、――」
支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送った。
「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私（わたくし）たちは新民屯（しんみんとん）へ、紙幣（しへい）を取り換えに出かけて来たのです。御覧下さい。ここに紙幣もあります。」
髯（ひげ）のある男は平然と、将校たちの顔を眺め廻した。
参謀はちょいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心好（い）い気味に思われたのだ。……
「紙幣を取り換える？　命がけでか？」
副官は負惜（まけおし）みの冷笑を洩らした。

「とにかく裸にして見よう。」

参謀の言葉が通訳されると、彼等はやはり悪びれずに、早速赤裸になって見せた。

「まだ腹巻をしているじゃないか？　それをこっちへとって見せろ。」

通訳が腹巻を受けとる時、その白木綿に体温のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはいっていた。旅団参謀は窓明りに、何度もその針を検べて見た。が、それも平たい頭に、梅花の模様がついているほか、何も変った所はなかった。

「何か、これは？」

「私は鍼医です。」

髯のある男はためらわずに、悠然と参謀の問に答えた。

「次手に靴も脱いで見ろ。」

彼等はほとんど無表情に、隠すべき所も隠そうとせず、検査の結果を眺めていた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を検べて見ても、証拠になる品は見当らなかった。この上は靴を壊して見るよりほかはない。――そう思った副官は、参謀にその旨を話そうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司

令部の幕僚（ばくりょう）や、旅団長などがはいって来た。将軍は副官や軍参謀と、ちょうど何かの打ち合せのため、旅団長を尋ねて来ていたのだった。

「露探（ろたん）か？」

将軍はこう尋ねたまま、支那人の前に足を止めた。そうして彼等の裸姿（はだかすがた）へ、じっと鋭い眼を注いだ。後（のち）にある亜米利加（アメリカ）人が、この有名な将軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。――そのモノメニアックな眼の色が、殊にこう云う場合には、気味の悪い輝きを加えるのだった。

旅団参謀は将軍に、ざっと事件の顛末（てんまつ）を話した。が、将軍は思い出したように、時々頷（うなず）いて見せるばかりだった。

「この上はもうぶん擲（なぐ）ってでも、白状させるほかはないのですが、――」

参謀がこう云いかけた時、将軍は地図（ちず）を持った手に、床（ゆか）の上にある支那靴を指（ゆびさ）した。

「あの靴を壊（こわ）して見給え。」

靴は見る見る底をまくられた。するとそこに縫いこまれた、四五枚の地図と秘密書類が、たちまちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、

さすがに顔の色を失ってしまった。が、やはり押し黙ったまま、剛情に敷瓦を見つめていた。
「そんな事だろうと思っていた。」
将軍は旅団長を顧みながら、得意そうに微笑を洩した。
「しかし靴とはまた考えたものですね。——おい、もうその連中には着物を着せてやれ。——こんな間諜は始めてです。」
「軍司令官閣下の烱眼には驚きました。」
旅団副官は旅団長へ、間諜の証拠品を渡しながら、愛嬌の好い笑顔を見せた。——あたかも靴に目をつ

けたのは、将軍よりも彼自身が、先だった事も忘れたように。

「だが裸にしてもないとすれば、靴よりほかに隠せないじゃないか？」

将軍はまだ上機嫌だった。

「わしはすぐに靴と睨んだ。」

「どうもこの辺の住民はいけません。我々がここへ来た時も、日の丸の旗を出したのですが、その癖家の中を検べて見れば、大抵露西亜の旗を持っているのです。」

旅団長も何か浮き浮きしていた。

「つまり奸佞邪智なのじゃね。」

「そうです。煮ても焼いても食えないのです。」

こんな会話が続いている内、旅団参謀はまだ通訳と、二人の支那人を検べていた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顔を向けると、吐き出すようにこう命じた。

「おい歩兵！　この間諜はお前が摑まえて来たのだから、次手にお前が殺して来い。」

二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髪を結ばれたまま、枯柳の根がたに坐っていた。

田口一等卒は銃剣をつけると、まず辮髪を解き放し

た。それから銃を構えたまま、年下の男の後(うしろ)に立った。が、彼等を突殺す前に、殺すと云う事だけは告げたいと思った。

「儞(ニイ)、――」

彼はそう云って見たが、「殺す」と云う支那語を知らなかった。

「儞(ニイ)、殺すぞ！」

二人の支那人は云い合せたように、じろりと彼を振り返った。しかし驚いたけはいも見せず、それぞれ別々の方角へ、何度も叩頭(こうとう)を続け出した。「故郷へ別れを告げているのだ。」――田口一等卒は身構えながら、

こうその叩頭を解釈した。
叩頭が一通り済んでしまうと、彼等は覚悟をきめたように、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃剣が突き刺せなかった。
「儞（ニイ）、殺すぞ！」
彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨（またが）った騎兵が一人、蹄（ひづめ）に砂埃（すなほこり）を巻き揚げて来た。
「歩兵！」
騎兵は——近づいたのを見れば曹長（そうちょう）だった。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩（ゆる）めながら、

傲然(ごうぜん)と彼に声をかけた。

「露探(ろたん)か？　露探だろう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑(くしょう)した。

「何、二人とも上げます。」

「そうか？　それは気前が好(い)いな。」

騎兵は身軽に馬を下りた。そうして支那人の後(うしろ)にまわると、腰の日本刀を抜き放した。その時また村の方から、勇しい馬蹄(ばてい)の響と共に、三人の将校が近づいて来た。騎兵はそれに頓着(とんちゃく)せず、まっ向(こう)に刀(とう)を振り上げた。が、まだその刀を下(おろ)さない内に、三人の将校

は悠々と、彼等の側へ通りかかった。軍司令官！　騎兵は田口一等卒と一しょに、馬上の将軍を見上げながら、正しい挙手の礼をした。

「露探だな。」

将軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！　斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬った。支那人の頭は躍るように、枯柳の根もとに転げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑点を拡げ出した。

「よし。見事だ。」

将軍は愉快そうに頷（うなず）きながら、それなり馬を歩ませて行った。
騎兵は将軍を見送ると、血に染（そ）んだ刀（とう）を提（ひっさ）げたまま、もう一人の支那人の後（うしろ）に立った。その態度は将軍以上に、殺戮（さつりく）を喜ぶ気色（けしき）があった。「この××らばおれにも殺せる。」——田口一等卒はそう思いながら、枯柳の根もとに腰を下（おろ）した。騎兵はまた刀（とう）を振り上げた。が、髯（ひげ）のある支那人は、黙然（もくねん）と首を伸ばしたぎり、睫毛（まつげ）一つ動かさなかった。……
将軍に従った軍参謀の一人、——穂積中佐（ほづみちゅうさ）は鞍（くら）の上に、春寒（しゅんかん）の曠野（こうや）を眺めて行った。が、遠い枯木立（かれこだち）や、

路ばたに倒れた石敢当も、中佐の眼には映らなかった。それは彼の頭には、一時愛読したスタンダアルの言葉が、絶えず漂って来るからだった。

「私は勲章に埋った人間を見ると、あれだけの勲章を手に入れるには、どのくらい××な事ばかりしたか、それが気になって仕方がない。……」

――ふと気がつけば彼の馬は、ずっと将軍に遅れていた。中佐は軽い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。ちょうど当り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三　陣中の芝居

　明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡(あきつぎゅうほう)に駐(とどま)っていた、第×軍司令部では、午前に招魂祭(しょうこんさい)を行った後(のち)、余興(よきょう)の演芸会を催(もよお)す事になった。会場は支那の村落に多い、野天(のでん)の戯台(ぎだい)を応用した、急拵(きゅうごしらえ)の舞台の前に、天幕(テント)を張り渡したに過ぎなかった。が、その蓆敷(むしろじき)の会場には、もう一時の定刻前(ぜん)に、大勢(おおぜい)の兵卒が集っていた。この薄汚いカアキイ服に、銃剣を下げた兵卒の群(むれ)は、ほとんど看客(かんかく)と呼ぶのさえも、皮肉な感じを起させるほど、みじめな看客に違いなかった。が、それ

だけまた彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層可憐(かれん)な気がするのだった。

将軍を始め軍司令部や、兵站監部(へいたんかんぶ)の将校たちは、外国の従軍武官たちと、その後(うしろ)の小高い土地に、ずらりと椅子(いす)を並べていた。そこには参謀肩章だの、副官の襷(たすき)だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客(かんかく)席より、遥かに空気が花やかだった。殊に外国の従軍武官は、愚物(ぐぶつ)の名の高い一人でさえも、この花やかさを扶(たす)けるためには、軍司令官以上の効果があった。

将軍は今日も上機嫌(じょうきげん)だった。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見ている、――その眼にも

始終日光のように、人懐（ひとなつ）こい微笑が浮んでいた。

その内に定刻の一時になった。桜の花や日の出をとり合せた、手際の好（い）い幕の後（うしろ）では、何度か鳴りの悪い拍子木（ひょうしぎ）が響いた。と思うとその幕は、余興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行った。

舞台は日本の室内だった。それが米屋の店だと云う事は、一隅に積まれた米俵が、わずかに暗示を与えていた。そこへ前垂掛（まえだれが）けの米屋の主人が、「お鍋（なべ）や、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背（せ）の高い、銀杏返（いちょうがえ）しの下女を呼び出して来た。それから、――筋は話すにも足りない、一場（いちじょう）の俄（にわか）が始まった。

舞台の悪ふざけが加わる度に、蓆敷(むしろじき)の上の看客からは、何度も笑声(しょうせい)が立ち昇(のぼ)った。いや、その後(うしろ)の将校たちも、大部分は笑(わらい)を浮べていた。が、俄はその笑と競(きそ)うように、ますます滑稽(こっけい)を重ねて行った。そうしてとうとうしまいには、越中褌(えっちゅうふんどし)一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲(すもう)をとり始める所になった。

笑声はさらに高まった。兵站監部(へいたんかんぶ)のある大尉なぞは、この滑稽を迎えるため、ほとんど拍手さえしようとした。ちょうどその途端だった。突然烈しい叱咤(しった)の声は、湧き返っている笑の上へ、鞭(むち)を加えるように響き渡った。

「何だ、その醜態（しゅうたい）は？　幕を引け！　幕を！」
声の主（ぬし）は将軍だった。将軍は太い軍刀の欛（つか）に、手袋の両手を重ねたまま、厳然と舞台を睨（にら）んで居た。
幕引きの少尉は命令通り、呆気（あっけ）にとられた役者たちの前へ、倉皇（そうこう）とさっきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの声のほかは、ひっそりと静まり返ってしまった。
外国の従軍武官たちと、一つ席にいた穂積（ほづみ）中佐は、この沈黙を気の毒に思った。俄は勿論彼の顔には、微笑さえも浮ばせなかった。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの余裕はあった。では外国武官たちに、

裸(はだか)の相撲を見せても好(い)いか？——そう云う体面を重ずるには、何年か欧洲(おうしゅう)に留学した彼は、余りに外国人を知り過ぎていた。

「どうしたのですか？」

仏蘭西(フランス)の将校は驚いたように、穂積中佐をふりかえった。

「将軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——将軍は下品な事は嫌いなのです。」

そう云う内にもう一度、舞台の拍子木(ひょうしぎ)が鳴り始めた。

静まり返っていた兵卒たちは、この音に元気を取り直したのか、そこここから拍手を送り出した。穂積中佐もほっとしながら、彼の周囲を眺め廻した。周囲に居並んだ将校たちは、いずれも幾分か気兼そうに、舞台を見たり見なかったりしている、——その中にたった一人、やはり軍刀へ手をのせたまま、ちょうど幕の開き出した舞台へ、じっと眼を注いでいた。

　次の幕は前と反対に、人情がかった旧劇だった。舞台にはただ屏風のほかに、火のともった行燈が置いてあった。そこに頬骨の高い年増が一人、猪首の町人と酒を飲んでいた。年増は時々金切声に、「若旦那」と相

手の町人を呼んだ。そうして、——穂積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶に浸(ひた)り出した。柳盛座(りゅうせいざ)の二階の手すりには、十二三の少年が倚(よ)りかかっている。舞台には桜の釣り枝がある。火影(ほかげ)の多い町の書割(かきわり)がある。その中に二銭(にせん)の団洲(だんしゅう)と呼ばれた、和光(わこう)の不破伴左衛門(ふわばんざえもん)が、編笠(あみがさ)を片手に見得(みえ)をしている。少年は舞台に見入ったまま、ほとんど息さえもつこうとしない。彼にもそんな時代があった。……

「余興やめ！　幕を引かんか？　幕！　幕！」

将軍の声は爆弾のように、中佐の追憶を打ち砕(くだ)いた。中佐は舞台へ眼を返した。舞台にはすでに狼狽(ろうばい)した少

尉が、幕と共に走っていた。その間（あいだ）にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かっているのが見えた。

中佐は思わず苦笑（くしょう）した。「余興掛も気（き）が利かなすぎる。男女の相撲さえ禁じている将軍が、濡れ場（ぬれば）を黙って見ている筈がない。」——そんな事を考えながら、叱声（しっせい）の起った席を見ると、将軍はまだ不機嫌そうに、余興掛の一等主計（いっとうしゅけい）と、何か問答を重ねていた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪い亜米利加（アメリカ）の武官が、隣に坐った仏蘭西（フランス）の武官へ、こう話しかける声を捉（とら）えた。

「将軍Nも楽（らく）じゃない。軍司令官兼検閲官（けんえつかん）だから、——

—」
　やっと三幕目が始まったのは、それから十分の後だった。今度は木がはいっても、兵卒たちは拍手を送らなかった。
「可哀そうに。監視されながら、芝居を見ているようだ。」——穂積中佐は憐むように、ほとんど大きな話声も立てない、カアキイ服の群を見渡した。
　三幕目の舞台は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあった。それはどこから伐って来たか、生々しい実際の葉柳だった。そこに警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡査をいじめていた。穂積中佐は番附の上へ、

不審そうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盗清水定吉、大川端捕物の場」と書いてあった。

年の若い巡査は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長々と浩歎の独白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル強盗をつけ廻しているが、逮捕出来ないとか云うのだった。それから人影でも認めたのか、彼は相手に見つからないため、一まず大川の水の中へ姿を隠そうと決心した。そうして後の黒幕の外へ、頭からさきに這いこんでしまった。その恰好は贔屓眼に見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳へはいるのに適当していた。

空虚の舞台にはしばらくの間、波の音を思わせるらしい、大太鼓の音がするだけだった。と、たちまち一方から、盲人が一人歩いて来た。盲人は杖をつき立てながら、そのまま向うへはいろうとする、――その途端に黒幕の外から、さっきの巡査が飛び出して来た。
「ピストル強盗、清水定吉、御用だ!」――彼はそう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかった。盲人は咄嗟に身構えをした。と思うと眼がぱっちりあいた。
「憾むらくは眼が小さ過ぎる。」――中佐は微笑を浮べながら、内心大人気ない批評を下した。
舞台では立ち廻りが始まっていた。ピストル強盗は

渾名通り、ちゃんとピストルを用意していた。二発、三発、――ピストルは続けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう偽目くらに縄をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり声一つかからなかった。

中佐は将軍へ眼をやった。将軍は今度も熱心に、じっと舞台を眺めていた。しかしその顔は以前よりも、遥かに柔しみを湛えていた。

そこへ舞台には一方から、署長とその部下とが駈けつけて来た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸に中った巡査は、もう昏々と倒れていた。署長はすぐ

に活（かつ）を入れた。その間（あいだ）に部下はいち早く、ピストル強盗の縄尻（なわじり）を捉（とら）えた。その後（あと）は署長と巡査との、旧劇めいた愁歎場（しゅうたんば）になった。署長は昔の名奉行（めいぶぎょう）のように、何か云い遺（のこ）す事はないかと云う。巡査は故郷に母がある、と云う。署長はまた母の事は心配するな。何かそのほかにも末期（まつご）の際に、心遺りはないかと云う。巡査は何も云う事はない、ピストル強盗を捉えたのは、この上もない満足だと云う。

——その時ひっそりした場内に、三度（さんど）将軍の声が響いた。が、今度は叱声（しっせい）の代りに、深い感激の嘆声だった。

「偉い奴じゃ。それでこそ日本男児じゃ。」
穂積中佐はもう一度、そっと将軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた将軍の頰には、涙の痕が光っていた。
「将軍は善人だ。」――中佐は軽い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。
その時幕は悠々と、盛んな喝采を浴びながら、舞台の前に引かれて行った。穂積中佐はその機会に、ひとり椅子から立ち上ると、会場の外へ歩み去った。
三十分の後、中佐は紙巻を啣えながら、やはり同参謀の中村少佐と、村はずれの空地を歩いていた。
「第×師団の余興は大成功だね。N閣下は非常に喜ん

でいられた。」
中村少佐はこう云う間（あいだ）も、カイゼル髭（ひげ）の端（はし）をひねっていた。
「第×師団の余興？　ああ、あのピストル強盗か？」
「ピストル強盗ばかりじゃない。閣下はあれから余興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云われた。今度は赤垣源蔵（あかがきげんぞう）だったがね。何と云うのかな、あれは？　徳利（とくり）の別れか？」
穂積中佐は微笑した眼に、広い野原を眺めまわした。もう高粱（こうりょう）の青んだ土には、かすかに陽炎（かげろう）が動いていた。
「それもまた大成功さ。――」

中村少佐は話し続けた。
「閣下は今夜も七時から、第×師団の余興掛に、寄席(よせ)的な事をやらせるそうだぜ。」
「寄席的？　落語(らくご)でもやらせるのかね？」
「何、講談だそうだ。水戸黄門(みとこうもん)諸国めぐり——」
穂積中佐は苦笑(くしょう)した。が、相手は無頓着に、元気のよい口調を続けて行った。
「閣下は水戸黄門が好きなのだそうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正(かとうきよまさ)とに、最も敬意を払っている。——そんな事を云っていられた。」
穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。

空には柳の枝の間（あいだ）に、細い雲母雲（きららぐも）が吹かれていた。

中佐はほっと息を吐（は）いた。

「春だね、いくら満洲（まんしゅう）でも。」

「内地はもう袷（あわせ）を着ているだろう。」

中村少佐は東京を思った。料理の上手な細君を思った。小学校へ行っている子供を思った。そうして——かすかに憂鬱になった。

「向うに杏（あんず）が咲いている。」

穂積中佐は嬉しそうに、遠い土塀に簇（むらが）った、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline………——

中佐の心にはいつのまにか、ユウゴオの歌が浮んでい

た。

四　父と子と

　大正七年十月のある夜、中村少将、——当時の軍参謀中村少佐は、西洋風の応接室に、火のついたハヴァナを啣えながら、ぼんやり安楽椅子によりかかっていた。

　二十年余りの閑日月は、少将を愛すべき老人にしていた。殊に今夜は和服のせいか、禿げ上った額のあたりや、肉のたるんだ口のまわりには、一層好人物じみ

た気色（けしき）があった。少将は椅子（いす）の背（せ）に靠（もた）れたまま、ゆっくり周囲を眺め廻した。それから、——急にため息を洩らした。

室の壁にはどこを見ても、西洋の画（え）の複製らしい、写真版の額（がく）が懸（か）けてあった。そのある物は窓に倚（よ）った、寂しい少女の肖像（しょうぞう）だった。またある物は糸杉の間（あいだ）に、太陽の見える風景だった。それらは皆電燈の光に、この古めかしい応接室へ、何か妙に薄ら寒い、厳粛（げんしゅく）な空気を与えていた。が、その空気はどう云う訣（わけ）か、少将には愉快でないらしかった。

無言（むごん）の何分かが過ぎ去った後（のち）、突然少将は室外に、

かすかなノックの音を聞いた。
「おはいり。」
その声と同時に室の中へは、大学の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少将の前に立つと、そこにあった椅子に手をやりながら、ぶっきらぼうにこう云った。
「何か御用ですか？　お父さん。」
「うん。まあ、そこにおかけ。」
青年は素直に腰を下した。
「何です？」
少将は返事をするために、青年の胸の金鈕へ、不審

らしい眼をやった。

「今日は？」

「今日は河合の――お父さんは御存知ないでしょう。――僕と同じ文科の学生です。河合の追悼会があったものですから、今帰ったばかりなのです。」

少将はちょいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやっと大儀そうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある画だね、これはお前が懸け換えたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでしたが、今朝僕が懸け

換えたのです。いけませんか？」
「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思う。」
「この中へですか？」
青年は思わず微笑した。
「この中へ懸けてはいけないかね？」
「いけないと云う事もありませんが、――しかしそれは可笑(おか)しいでしょう。」
「肖像画(しょうぞうが)はあすこにもあるようじゃないか？」
少将は炉(ろ)の上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブラントが、悠々と少将を見下して

いた。
「あれは別です。N将軍と一しょにはなりません。」
「そうか？　じゃ仕方がない。」
少将は容易に断念した。が、また葉巻の煙を吐きながら、静かにこう話を続けた。
「お前は、――と云うよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思っているね？」
「別にどうも思ってはいません。まあ、偉い軍人でしょう。」
青年は老いた父の眼に、晩酌（ばんしゃく）の酔（よい）を感じていた。
「それは偉い軍人だがね、閣下はまた実に長者（ちょうじゃ）らしい、

人懐(ひとなつ)こい性格も持っていられた。……」

少将はほとんど、感傷的に、将軍の逸話(いつわ)を話し出した。それは日露戦役後、少将が那須野(なすの)の別荘に、将軍を訪れた時の事だった。その日別荘へ行って見ると、将軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになった、――そう云う別荘番の話だった。少将は案内を知っていたから、早速(さっそく)裏山へ出かける事にした。すると二三町行った所に、綿服を纏(まと)った将軍が、夫人と一しょに佇(たたず)んでいた。少将はこの老夫妻と、しばらくの間(あいだ)立ち話をした。が、将軍はいつまでたっても、そこを立ち去ろうとしなかった。「何かここに用でもおありで

すか？」――こう少将が尋ねると、将軍は急に笑い出した。「実はね、今妻が憚りへ行きたいと云うものだから、わしたちについて来た学生たちが、場所を探しに行ってくれた所じゃ。」ちょうど今頃、――もう路ばたに毬栗などが、転がっている時分だった。

　少将は眼を細くしたまま、嬉しそうに独り微笑した。――そこへ色づいた林の中から、勢の好い中学生が、四五人同時に飛び出して来た。彼等は少将に頓着せず、将軍夫妻をとり囲むと、口々に彼等が夫人のために、見つけて来た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に来て貰うように、無邪気な競争さ

え始めるのだった。「じゃあなた方に籤を引いて貰おう。」――将軍はこう云ってから、もう一度少将に笑顔を見せた。……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑わずにはいられなかった。

「まあそんな調子でね、十二三の中学生でも、N閣下と云いさえすれば、叔父さんのように懐いていたものだ。閣下はお前がたの思うように、決して一介の武弁じゃない。」

少将は楽しそうに話し終ると、また炉の上のレムブ

ラントを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描(えか)きです。」

「N閣下などとはどうだろう？」

青年の顔には当惑の色が浮んだ。

「どうと云っても困りますが、——まあN将軍などよりも、僕等に近い気もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云うのは？」

「何と云えば好(い)いですか？——まあ、こんな点ですね、たとえば今日追悼会(ついとうかい)のあった、河合(かわい)と云う男などは、やはり自殺しているのです。が、自殺する前に——」

青年は真面目（まじめ）に父の顔を見た。
「写真をとる余裕（よゆう）はなかったようです。」
今度は機嫌の好（い）い少将の眼に、ちらりと当惑の色が浮んだ。
「写真をとっても好（い）いじゃないか？　最後の記念と云う意味もあるし、——」
「誰のためにですか？」
「誰と云う事もないが、——我々始めN閣下の最後の顔は見たいじゃないか？」
「それは少くともN将軍は、考うべき事ではないと思うのです。僕は将軍の自殺した気もちは、幾分かわか

るような気がします。しかし写真をとったのはわかりません。まさか死後その写真が、どこの店頭にも飾（かざ）られる事を、――」

少将はほとんど、憤然（ふんぜん）と、青年の言葉を遮（さえぎ）った。

「それは酷（こく）だ。閣下はそんな俗人じゃない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不相変（あいかわらず）、顔色（かおいろ）も声も落着いていた。

「無論俗人じゃなかったでしょう。至誠の人だった事も想像出来ます。ただその至誠が僕等には、どうもはっきりのみこめないのです。僕等より後（のち）の人間には、なおさら通じるとは思われません。……」

父と子とはしばらくの間、気まずい沈黙を続けていた。

「時代の違いだね。」

少将はやっとつけ加えた。

「ええ、まあ、――」

青年はこう云いかけたなり、ちょいと窓の外のけはいに、耳を傾けるような眼つきになった。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少将は足を伸ばしたまま、嬉しそうに話頭を転換した。

「また榲桲（マルメロ）が落ちなければ好（い）いが、……」

（大正十年十二月）

底本：「芥川龍之介全集４」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
１９９６（平成８）年７月15日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月12日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。